

Title	貧国論「貧乏物語」を読む
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1917
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.11, No.6 (1917. 6) ,p.789(83)- 805(99)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19170601-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

和蘭	三七、六三九	一二一、五五二	八三、九一三
諸威	八、四一二	九、二五六	八四四
瑞典	一一、八七五	一三、五八六	一、七一
奧匈國	一九、〇八四	二二、二四四	三、一六〇

右の表に據れば、米獨兩國間の貿易は千九百十五年に於ては、千九百十三年に比較して、約十分の一に低減したることを知可し。然れども獨逸に隣接する諸中立國に對する合衆國の輸出の増加したる事實に顧みるときは、千九百十五年に於ては諸國の合衆國より輸入したる物資の獨逸に輸送せられたることを示すものとす可く、隨て合衆國に對する獨逸外國貿易の減少は世間の想像するが如く大ならざる可し。然も聯合諸國と獨逸とを對照し、聯合諸國の爲替相場に於ける低落が異常の輸入に基くに反し、獨逸に於ては輸入減少して、尙ほ爲替相場の逆勢に居るは何故なりや。蓋し獨逸は爲替相場の調節

二八、四九四	一四三、一三一	一一四、六三七
六、九八二	四六、八七二	三九、八九〇
一一、三七四	八四、八〇七	七三、四三二
五、二二一	五、三二五	一〇四

を求むる爲めに、大なる程度に於て、金貨を輸出するを回避したり。而して開戰當初アムスターダム并に紐育に於て、獨逸は巨額の外國有價證券を賣却し、以て一時の急に應じたるが、一方より云ふときは、此事たる、千九百十五年の終に至り、獨逸をして是等有價證券より生ずる利子を喪失し、無形の輸出を減縮するに至らしめたることを否定す可からず。中立諸國に對する獨逸爲替の低落は通貨の價格下落を示すものにして、獨逸が平和恢復後永く金貨本位制に復歸せざる以上は、此狀勢永續せざるを得ざる可し。

貧 困 論

「貧乏物語」を読む

小 泉 信 三

十餘年前讀賣紙上に連載されたる「社會主義評論」以來河上博士が持つ數多き愛讀者の一人たる私は博士が最新の著作「貧乏物語」を實に期待を以て讀んだ。而して私は己れの期待が欺かれざりしことを喜んだ。巧妙なる話説と、實に朗々誦す可き流暢無比の文章とに魅せられて全編三百餘頁を殆ど一氣に通讀し、終に最後の頁の最後の一行を讀み終へたるとき、自分は常に學問文藝上の優れたる作品を讀みたるときにのみ感ずる一種の満足を感じた。良書を讀んで好い事をしたと感じたのである。私は此満足を感じつゝ茲に其紹介の一文を草す可く筆を執る。

未だ之を讀まざる者に此書を薦め、既に讀みたる者に向つては稍々詳らかに讀後の感想を語らんが爲めである。

河上博士は我經濟學者中稀れに見る名文家を以て知られて居る。けれども私は信ずる自分——少くも私一個——が博士の文章に魅力を感じるのには其文字の技巧(或は技巧のみ)によるのではなくて、その觀察に於ける機警と思考に於ける獨創との故を以てである。私は決して博士の着眼觀察を以て常に當を得たりと信ずるものではない。後進吾々の如きすら、博士の唱へらるゝ學說の中に服し難きものを見出すことは決して一二にして止まらぬけれども、併乍ら博士の學說に對しては如何に異見を懷抱するものとも、博士が今日の學界に於て最も特色ある學者の一人なることは必ず之を否まぬであらう。博士の作物には常に良かれ悪しかれ其著者の顯著なる個人的色彩が現はれて居る。而して此個

人的特色を顯はすの一事は如何なる物をも自己の目を以て見、如何なる事をも自己の頭を以て考へ、如何なる問題に對しても自己獨特の解釋を下すことの出来るものにして始めて能くし得る所である。而して獨創的なものは常に新しい。吾々が文藝學問上の傑れたる作品を讀むに當つて必ず經驗する一味清新の感は即ち常に其作者の大なる獨創力を物語るに非ざるはないのである。私は嘗て河上博士の作れる「徹底」と題する短かき一文を讀んだ。偉人の事業は常に徹底して居る。正しいものは正しく、謬れるは謬れるなりに兎に角行く可き所まで突き貫けて居る。而して其處に必ず偉大なる發見がある。若し私の記憶にして過たすとすれば之れが其一篇の主意であつた。此一文に依て私は「貧乏物語」の著者が其學問上の勞作に於て期する所の何れにあるかを略ぼ窺ひ得たるかの如く思ふ。まことに博士の論說に對しては反對者が少くない。

併し乍ら如何なる反對者と雖も博士を批評するに平凡常套陳腐等の言葉を以てするものはないであらう。何となれば博士の長所而して同時に其短所は實に其正反對の極點にあるからである。而して私自身は此長所と短所とあるの故を以て常に博士の作物を尊敬する。署名を除けば誰れの手になるかも知かならざるが如き著書論文の多い其中に嶄然として個人的特色を放つこと河上博士の業作の如きは、其說の當否に論なく、たゞ其特色の著しいと云ふ一事だけを以て先づ貴重す可きものであると自分は確く信じて居るのである。

著者に就て數言の所感を述べたる後、次に私は本題に入つて「貧乏物語」其者を論じなければならぬ。「貧乏物語」は本と續き物として大阪朝日新聞に連載されたものである。掲載の日は大正五年九月十二日に始まつて同年十二月廿六

日に終つて居る。之を一冊の書に纏めると(附録ロイドジョシ論を除けば)四六版三百頁に満たぬから分量に於ては決して大冊と稱す可きものではない。而して此の三百頁は上中下三篇に分たれ、上篇は如何に多數の人が貧乏して居る乎。中篇は何故に多數の人が貧乏して居る乎。下篇は如何にして貧乏を根絶し得べき乎の問題を論じて居る。自分は今序を追ふて是等の三篇に説かれたる著者の見解を紹介し且つ批評する筈であるがそれを爲すに先だちて、一言を此書の標題に關して費やさなければならぬと思ふ。此書は「貧乏物語」と題されてある。「貧困論」とも「貧窮根絶論」ともせず「貧乏物語」とされてある。此標題は著者が如何なる態度を以て此書を著はしたかを充分明かに語つて居る。著者は専門學者に向つて研究の結果を發表しやうとするのではない。何等の素養なく何等の豫備知識を有せざる一般世間を相手にして貧乏問題に關

する一場の物語を試みやうとして居るのである大學の講壇を降たり、敎授のガウンを脱ぎ捨て謂はゞ街頭に出で、民衆の爲めに道を説かんとして居るのである。之は果して容易な仕事であるだらうか、それとも困難な事業であらうか。此問に對しては何れとも答へられる。専門家ならざる民衆を相手にする時には無責任な放言を敢てして構はぬと云ふならば、民衆相手の通俗經濟談ほど容易の仕事はない。反之、學理を説いて一般民衆に興味を感せしめると同時に嚴格精細なる専門學者の批評にも堪へ得るものを作らなければならぬとすれば、之に超へたる困難事は蓋し尠ないのである。相手となる民衆に素養がなければいほど、豫備知識が乏しければ乏しい程その興味を引き了解を求める必要はやがて一方に於て屢々其著作の學問上の價值を犠牲にするの危險に導くのである。まことに佛蘭西語に云ふ *Vulgarisation* は英語の *Vulgarisation*

に陥り易い。學問の尊嚴品格を傷けることなく而かも容易に民衆をして之に近づき得せしむるは老手にして始めて能くする所である。此點に於て河上博士の成功は殆ど完全に近い。私は「貧乏物語」の所説に就ては之から先き多少の異見を述べるつもりであるけれども博士が毫も學問を俗了することなくして而かも能く之を民衆化せられたる成功に對してはたい敬意を表するの外、他を知らざる者である。私は如何なる人に向つても「面白き讀物」として「貧乏物語」を薦め得ることを喜ぶと同時に同學の如何なる友人先輩に向つても有益なる著作として此書を紹介することを少しも躊躇しないものである。

却説貧乏とは抑も何ぞや。「貧乏物語」の著者は答へて曰ふ。貧乏と云ふ言葉には凡そ三の意味がある。第一はより富める、若しくはより貧しきと云ふ意味に於ての貧乏である。即ち「例へば久原に比ぶれば濫澤は貧乏人であり、濫澤

に比ぶれば河上は貧乏人である」と云ふの類である。此場合の貧乏の要素をなすものは「經濟上の不平等」と云ふ事に存する。更に第二に貧乏と云ふ言葉は自ら給すること能はずして他人の救恤を仰ぐと云ふ意味にも用ひられる。即ち此場合の貧乏人は英語の所謂 Pauper で救貧制度に厄介をかけて居る人間の意味である。この第二の意味に於ける貧乏の要素は「經濟上の依頼」と云ふことにある。併乍ら河上博士が「貧乏物語」に於て専ら主題となす所は上記二つの意味に於ける貧乏ではなくて、第三の意味に於ける貧乏である。第三の意味に於ける貧乏とは何ぞやと云へば其要素とする所は「經濟上の不足」と云ふ事にある。「經濟上の不足」とは肉體の健康を維持するに必要欠く可らざる物質の最低量を得て居ないか或は其丈けは辛うじて得るも其以上には寸毫の餘裕をも持たぬと云ふ事である此意味に於ける貧乏を説明するに當つて著者は

Seeborn Rowntree 等と共に「貧乏線」なる言葉を用ひて居る。即ち肉體の健康維持に欠く可らざる費用の最低限を根據として一線を引いて之を貧乏線と名づけ、此線以下に下れるものを第一種の貧乏人となし、辛うじて此線上に止まれるものを稱して第二種の貧乏人となすのである而して「貧乏物語」は専ら此二つに就て議論をする。ところで何を以て肉體の健康維持に欠く可らざる必要費となすかに就て著者は生活必要物の中最重要なる食物のみに就て稍々詳しく説明を施したる後 Atwater の計算に準據して普通の成年男子は一日三千五百カロリーの熱量を發する丈けの食物を攝取しなければならぬと論斷して居る。茲で姑らく三千五百カロリーの数字を容認するとして私が切に知らんと欲して而して不幸にして「貧乏物語」に依て學ぶことを得ざるはこの三千五百カロリーの熱量を發するには如何なる食物を如何なる分量丈け取れば好いか

と云ふ事と、それ丈けの食物を購買するには本邦現在の物價を標準とすれば大凡そ幾許の費用を要するかと云ふこととである。此問題に答へることは各種の統計の不備なる我邦に於ては最も困難な仕事である云ふ事は私もよく諒察する。併し乍ら私はそれが困難であるの故を以て之を著者に要求することが無理であるとは決して信ぜぬ。嚴格に云へば大人が健全に生きて行くには一日三千五百カロリーの熱量を要すると云ふ事は生理學と云ふか衛生學と云ふか兎に角他の學問の掌る可き範圍であつて經濟學の領分には屬して居ないのである。經濟學はその三千五百カロリーの熱量を發する丈けの食物を獲得する(買ふ)爲めには幾許の費用が要せられるかと云ふ事のみを問題にするのである。三千五百カロリーの云々は經濟學上の問題の前提に過ぎないのである。此點に於て著者の屢々引用する Rowntree は善く其任務を了解して居るやうであ

る。彼は熱量云々の論から更に進んで、所要熱量を得る爲めに、最も合理的に且つ節約的に食餌を撰擇すれば如何なる物を如何なる分量だけ取らなければならぬかを可なり詳細に説明し而して最後に其調査の目的地たるヨーク市の物價を標準として、大人は男女を平均して一週三志、小兒は十六歳以下各年齢を平均して一週三志三片を食物の爲めに費やさなければならぬと計算して居る。此計算あつて而して始めて吾々は何を以て貧乏人となし何を以て貧乏人に非ずとなすかを定めることが出来るのである。

兎に角「貧乏物語」が主題とする所の貧乏人の意味はこれで明かになつた。次に河上博士は Rowtree, Boorh, Bowley, Burnett-Hurst King, Hunter 等の調査に基づき上述の意味に於ける貧乏人が歐米諸國に於て如何に驚く可き多數に上りつゝあるかを示して居る。即ちロントリイに従へばヨーク市の住民七萬五千八百十二人

中第一級及び第二級に屬する貧乏人を合算すれば二萬三百二人、即ちその二割七分八厘四毛に相當し、又ブリスに従へば一八九一年の當時倫敦全住民の中實に其三割零七厘は貧民階級に屬して居るのである。此事實は既にそれだけで苟も誠實な感情を持て居る人々をして現在經濟組織の價値なるものに對して多少懷疑の念を起こさせる可く充分である。併乍ら如何なる場合にも現狀を謳歌する太平樂天の考へは多くの人の頭を支配して居る。文明諸國に於ける貧乏人の斯く驚く可き多數に上りて居る事實を示しても世人の多くは猶ほ之を以て當然の事となすかも知れない。金持ちは勤勉に働くから金持ちになつたのである。貧乏人が貧乏して居るのは怠けて居て働かないからである。その當然の應報である。或人々は考へるかも知れない。著者は是等人士に向つて一矢を報ひる必要を認めた彼は故石川啄木の短歌一首を以て其上篇第三節の筆

を起こして居る。

はたらけどはたらけど猶わが生活樂にならざりぢつと手を見る

今日多數の貧乏人は働らないから貧乏して居るのだなどとは無知か破廉耻の言はせる言葉である。今日貧乏人の最大多數は如何に働き如何にもがき苦しんでも到底貧乏から脱れることの出来ない境遇に置かれてゐるのである。今ロントリイの著書に従へばヨーク市の貧乏人の五割一步強は毎日毎日規則正しく働いて居るにも拘らずたゞ其賃銀が充分でない爲め貧乏線下に沈淪して居るのである。更に他の二三市に就てのボウレエの調査も亦略々同一の結論に到着して居る。之を以て見ても貧乏人の貧乏は己れが求めて陷る所だなどとは決して云へた義理ではないのである。彼等の貧乏は「いくら働いても貧乏は免れぬぞと云ふ『絶望的の貧乏』」なのである。尋常小學讀本の卷八に「働くこと

は人の本分」と云ふ一章がある。その中に「……人の幸福は皆自分の働きで産み出す外はない。何もしないで遊んで居るのは樂のやうに見えるが、却て苦しいものである」とあるのに對して河上博士は曰ふ「何もしないで遊んでゐるのこそ苦しいだらうが、いろ／＼な事をして遊んでゐるのは、飢えながら毎日働いて居るよりも遙かに樂であらう」と。吾輩は博士が此言をなしたる時其面上に浮べたる苦がき微笑を目に見るやうに心に描くことが出来る。

然り、斯の如く多數の人間が絶望的の貧乏に沈淪して居る。次に來る可きは何故に斯く多數の人間が貧乏に苦しみつゝあるか及び如何にせば此貧乏を根絶することを得可きやの問題である。併乍ら進んで此兩箇の問題に觸れるに先だち、吾々は暫らく停まつて、右に述べたる如き多數人の貧乏は抑も何が故に吾々に取つて重大の問題たるかを考へて見なければならぬ。今多

言を費やして此問題に答へる代りに吾輩をして簡単に著者が其序文の中に引く所を再び茲に引用するの自由を得せしめよ。曰く、「人はパンのみにて生くものに非ず。されど又麴麴なくして人は生くものに非ず。又曰く、「恒産なくして心あるは惟だ士のみ能くするを爲す、民の如きは則ち恒産なくんば困つて恒心なく、苟くも恒心なくんば放辟邪侈、爲さるるところなし。」更に又曰く「There is no wealth but life. (「富何者ぞ只生活あるのみ」と。之れ實に河上博士を促して「貧乏物語」一篇を作らしむる所の精神にして、而して此物語全體を一貫する Leitmotiv をなすものである。而して誠に著者の云ふが如く「經濟問題が眞に人生問題の一部となり、又經濟學が眞に學ぶに足るの學問となるも全く之が爲め」なのである。

以上を以て上篇の要旨は略ぼ盡きて居る。著者は貧乏人を「經濟上の不足」の意味に解し、

此意味に於ける貧乏の原因及び其根絶策如何の問題を中篇及び下篇に於て論じやうとするのである。吾々は著者が「貧乏物語」の主題を右の意味に解したる貧乏のみに限ることに對して抗議す可き權利を有たぬ。吾々はたゞかく解せられたる貧乏の原因並に根絶方法の論として中下兩篇は善く吾々を満足せしめ得るや否やを點驗するを以て満足せんとするものである。たゞ少くも私自身の見る所に從へば近代社會に於ける「貧乏」の問題は決して「經濟上の不足」の問題だけでは終つて居ない。何時の世に於ても多數の人間が貧乏線以下に沈淪して居ると云ふ事實は決して珍らしくない。「經濟上の不足」は決して現代經濟社會に特有の現象ではないのである。たゞ「經濟上の不足」が今一つの危険と結び付くことに依て始めて現代社會特有の「貧乏」を成すのである。物質の欠乏は勿論甚しく今日の貧乏人を苦しめつゝある。併しそれだけならば彼等

の境遇は今日よりも遙かに幸福であつたに相違ない。貧乏人の多數は被傭労働者である。而して被傭労働者は今日の經濟社會に於ては己れの責任に歸す可らざる原因の爲めに絶えず失職の危険に脅かされつゝある。個人の力を以てして到底如何ともす可らざる景氣の變動は忽ちにして貧乏人の口から其の既に充分乏しきパンを奪ひ去るのである。されば私の問題としやうとする「貧乏」は單なる物質の欠乏ではなくて、生活の不安固と結び付く所の物質の不足である。「經濟上の不足」だけならば何時の世に於ても解決を求める所の問題である。それが生活の不安固と結び付くに依て始めて經濟組織の根底に觸れたる近代社會特有の問題が提出されるのである。併し私は今此議論を進めて貧乏物語の著者を批評しやうとするのではない。たゞ自分が「貧乏」なる主題に就て議論する場合には決して「經濟上の不足」のみを問題とすることを以て満足せ

ぬであらうと云ふに止まる。河上博士が自ら問題の意味を限定し而して其の限られた範圍内に於てのみ議論するの自由を有することは論を俟たない。

さて中篇に於て著者は先づ吾々を拉し去つて蟻の世界を觀察せしめ、續いて五十萬年若しくは三十萬年前に於ける吾々の先祖たる「猿の人」及び「曙の人」に就て興味ある數日の物語を試みて居る。併し今私は其等に就て語ることを割愛しなればならぬ。著者の目的は要するに是等の興味ある物語から導いて道具機械の發明が如何に人間をして他の動物と比較す可らざる經濟的發展を遂げしめたかを示さんと欲するにある。まことに機械の發明は吾々の富の生産力を數千倍數萬倍に増加せしめた。然るにも拘らずこの驚く可き生産力を有する吾々の社會に於て前に述べたるが如き多數の人間が肉體の健康を

維持するに足るだけの物質をも得て居ないのは抑も何の爲めであらう。吾々は直ちに進んで著者の之に對する解答を聴かなければならぬ。

著者の答ふる所は著者が曾て論文「奢侈と貧困」の中に述べたる所を以て略ぼ盡きて居る一言にして之を云へば、「今日貧乏人が貧乏に苦しんで居るのは金持ちが贅澤に耽りつゝあるが爲めである」と云ふ事になる少しく之を説明せんに現在の經濟組織の下に於ては凡ての物の供給が皆營利の手段としてのみ行はれる。即ち或物の供給は、之をなす事が供給者に利潤をもたらす見込ある場合に於てのみ行はれるのである。

反面から見れば今日の社會に於ては購買力を伴ふ要求即ち經濟學にて云ふ需要ある所に於てのみ物の供給物の生産は行はれる。或人の或物に對する欲求如何に痛切なりと雖も、其人にして購買力を有せざる限り、斷じてその物の供給せらるゝ氣遣ひなきと同時に強大なる購買力を擁

する者即ち富豪の徒が欲する時は如何に無用有害の物なりともそれが直ちに生産せられ直ちに供給せられるのが現在の實狀である。ところで現在の經濟社會に於ては一定の時を取て觀察すれば限ある生産力は強大なる購買力を以て強請せらるゝ無用物の生産の爲めに割かれて、それだけ必要物の生産は減少しそれだけ多數の人間の痛切なる欲求は満たされずして終ることとなる。即ち河上博士の引例を借りて云へば一人の富豪が杜鵑の舌の吸物を需要し、大勢の人間が杜鵑を捕りに山へ入れば、それだけ例へば米なら米を作る人の數が減つて米の値が上ると云ふ次第なのである。(一三九—一四〇頁)而して著者の見る所に従へば之れが今日文明諸國に於いて多數の人々の貧乏に苦しみつゝある經濟組織上の主要原因である。(一四九頁)

今暫らく立停つて考へて見ると、今日成程多數の人間が貧乏に苦しみつゝあるのは差し當つ

ては金持ちが贅澤を行ふが爲めに、限りある天下の生産力が奢侈品生産の爲めに奪ひ去られ、多數の人間が欲求する生活必需品の生産が其れだけ制限されると云ふことに存することは河上博士の説の通りである。併し今一步進めて考へて見れば金持ちの贅澤を以て貧乏の窮極の原因なりとするこの不合理は何人の目にも明かであらう。贅澤を以て貧困の原因なりとする説は或前提を置いて其上に立てられたものである。第一は今日の營利經濟組織である。營利の爲めの生産と云ふ事がなくなれば奢侈品生産の爲めには必要品の爲めに投すべき生産力が犠牲に供せらるゝと云ふ事はなくなる可き筈である。第二には貧富の懸隔を與へられたる事實として前提として居る。即ち贅澤云々と云ふ時には一方には缺く可らざる生活必需品を要求する場合にも充分の購買力を以て之に臨むことの出来ない多數の人間あると同時に他方には無用なる(客

觀的には)贅澤品に向て巨大なる購買力を發揮し得る人間の存することを豫定して居るのである。此二つは人間の宿命で、如何ともすること能はざるものとすれば茲に始めて貧乏の原因は贅澤である云ふ事が出来やう。若し然らざるに於ては博士の説は眞理の全體を蔽はぬと評さなければならぬ。今營利經濟組織の事には姑らく觸れずに議論をすると、河上博士に従へば貧乏人が多いのは(即ち多くの人が生活上の必要物を得て居ないのは)多くの人の資力不十分に於て生産力をして命を聴かしむるに足りないからである。即ち多くの人が貧乏だからである。縮めて云へば貧乏人が多いのは貧乏人が多いからである云ふ事になる。之は一見非論理極まる斷案にして間に對する答の形をなして居ない。併し博士の辯明せらるる所に依れば博士の説は一見循環論法に陥つて居るやうに見えるけれども、實は私の議論がし循環して居るのでは

なくて、實際の事實が循環して居るのである」(一五〇頁)と云ふ。果して然るか。私は之を疑ふものである。所得の不平等の意味に於ける貧乏は、所得贏得者としての多數人の貧乏は消費費者としての彼等の貧乏を一層甚しからしめる原因となることまことに著者の説く所の如くである。併乍ら道は此處で行き止まりとなつて居る。貧乏物語の主題とする貧乏言葉を換へて云へば生活必需品の價格の不廉が翻つて再び更に所得不平等の意味に於ける貧乏の原因になるかと云へば私は否と答へざるを得ない。(河上博士も然りと答へて居ない。)因果は決して河上博士の云ふが如く循環して居るのではなくて、一方は常に原因にして他方は常に結果である。所得不平等の意味に於ける貧乏は物質缺乏の意味に於ける貧乏の原因となるけれども決してvice versaではないのである。私は決して循環と云ふ文字に拘泥して揚足を取るのではない、たゞ奢侈を

以て貧困の原因なりとする河上博士の説は決して窮極的に貧困の存在を説明して居らぬ事を云ひ度いのである。何故多數の人間が貧乏に苦しみつゝあるか。少數の者が贅澤を擅にして居るからである何故少數貧乏者が贅澤を擅にする事が出来るか。彼等が金持ちだからである。河上博士の奢侈貧困論は此推論の連鎖を途中までたどつて來て其處で議論を打切つて居る。金持ちと貧乏人の存在を既に與へられたるものとして其處から議論を出發させて居るのである。之れ私が博士の説は窮極的に貧乏の原因を説明し能はずと主張する所以である。

實行の上から見ても現在の貧富隔絶をその儘に放置し、たゞ金持ちの道義心に訴へて其贅澤を廢止せしめ、之に依て貧乏人の貧乏状態を改善せんとするは、全然不可能の事とは云ふ可らざるも、其前途に横はる多大の障害を除りに輕視した嫌がある。一先づ一方の集團には現状の

物價状態に於て生活資料の最少必要量をも買ふ事能はざらしむる程度の所得を與へ、他方の集團には贅澤品の購入に充てるより外に使ひ途なきほどの所得を與へ置きて、而る後其富者に向つて贅澤を行ふ勿れ、奢侈品を買ふ勿れと云ふのは故らに難きを以て人に求めるの譏りを免れぬ。まことに富者の贅澤が貧民の困窮を甚しからしむる原因なるならば、贅澤に耽る可き資力を之に與へて置いて而して後に贅澤する勿れと責めるよりも、始めから其れだけの資力を與へざるを以て賢明とする。試みに金持ちの身になつて想像して見ても、その有り餘まる所得をば全然奢侈品に投じないやうにするのは困難極まる仕事であらう。富者に取つては其生活必需品の爲めに投ずる所は所得の幾十幾百分の一に過ぎぬ。而して其の殘る所の大部分を何に投ずるかと云へば思ふに贅澤品の爲めに投ずるか、貯蓄して資本化するか或は之を無償に放棄して他

人に與ふるかの三途の外に出でぬであらう。今悉く奢侈的消費を廢止するとすれば、富豪が其所得の大部分を處分する方法は之を擧げて他人に寄附するか、或は之を資本として將來の所得贏得の用に供するか二途あるのみとなる。

若し富者が之を悉く第一の方法に依て處分するとすればそれは一旦不平等に分配されたる所得をば富者が自ら進んで平等に分配し直はすと云ふ事に外ならぬ。第二の方法を取る場合は今少しく複雑であるが要するに結果は同じ事に終るのである。即ち富者が所得の大部分を貯蓄して之を投資すれば之に由て彼の所得は將來益々増大する許りである。(即ち所得の不平等は益々甚しかる可きである。)而して所得益々大にして而かも彼は生活必要費以上に何ものをも費やさずとすれば一人の私の立場から見れば彼の大所得(並に大財産)は有るも無きも彼に取つて異なる所はない。而して之れだけの變革が單に富者の

道義的節制に訴へることに依て實現し得らるゝものと信ずる人があるならば私は彼がキリヤム

ゴドキン以後幾多の理想家と共に human perfectibility を信ずることの餘り樂天に過ぐるを批評せずには居られないのである。私は再三述べ

たるが如く先づ金持ちに向つては贅澤をするより外に使ひ途のない程の所得を與へて置いて然る後贅澤する勿れと訓戒するよりも、直ちに前提となつて居る貧富の懸隔其物を矯制する方法を講じた方がより一層適切であり、より少なく迂迴的であると思ふ。故に私は節儉の訓戒よりも例へば一般的國定最低資銀の實行の方が遙かに有效であるだらうと信ずるのである。

貧乏の原因如何に就ての河上博士の説を批評しつゝ私は不知不識の間に貧乏根絶の方法に關する議論にまで入り込んで居た。而して之は「貧乏物語」の下篇が取扱ふ所の主題である。私は再び本文に立ち歸つて著者の説く所を窺ひ、且

つ少しく之に對して卑見を述べなければならぬ。

自分の見る所を以てすれば貧乏物語二百九十六頁中下篇百四十六頁は讀み物として最も興味に富み且つ著者に於ても最も力を費やしたる部分であらう。併乍ら私は既に上中篇の爲めに意外に紙數を費やしたから下篇に就ては著者の苦心には敬意を表しつゝも興味多き幾多の挿話を凡て省略して、たゞ纔かに此一篇の結論とする所を傳へる丈けを以て満足しなければならぬ。既に中篇述ぶる所に従ひ河上博士は左の三つを以て貧乏根絶の方策とする。

第一 世の富者が自ら進んで一切の奢侈贅澤を廢止する事

第二 何等かの方法を以て貧富の懸隔甚しきを匡正し、社會一般人の所得をして著しき等差なからしむる事

第三 營利經濟組織を改むる事 (一五三—一五四頁)

右の三方法の中第二のものは若し之を徹底せしむるならば多くは第三策に歸入するに至るものだからとして之に就ては何等特別に論ずる所がない。従て殘る所は營利經濟組織の改造と富者の贅澤廢止との二つになる。著者は先づ第三策に就て語る。抑も今日の營利經濟組織の根柢に横はる利己心是認の個人主義は始め十八世紀の初頭に於て端を發し英國に歸化した和蘭人マンドヰルの「蜜蜂物語」に依て最も露骨な形に於て主張されたが我經濟學は實に其根本思想を此に承けて生れ出たものである。其個人主義を基礎とする社會に於ては富の生産は「使用の爲めの生産」production for use に非ずして常に「利潤の爲めの生産」production for profit として行はれる。従て生活必要物が如何に痛切に多數の者に依て要求せらるも是等の多數人が之に

對して高く拂ふ事能はざる限りは其物は斷じて供給されぬと同時に、如何に無用贅澤の品なりとも要求するものが之に對して高く拂ふことが出来るならば其物は直ちに生産されると云ふことになる。其處で貧乏を根絶せんとすれば此營利經濟組織を改めて重要な貨物の生産は之を國家の手に移す事猶ほ軍備、教育制度の然るが如くす可しと云ふ説が當然唱へられる譯である。這個個人主義の理論的缺點は今回の歐洲大亂に會して遺憾なく暴露された。即ち獨逸も佛蘭西も英吉利も爭つて其經濟組織の大改造を企て社會主義に近き組織を實現しつゝある所以である。述べて茲に至り博士は聲を新にして曰ふ、「思ふに收穫の時期は已に來れり、アダムスミスに依りて産れたる個人主義の經濟學は既に其使命を終へて、今は正に新なる經濟學の生れ出づ可き時である。看よ、世界の機運の滔々として移り行くことを。語にいふ、千溪萬壑滄海に歸

し、四海八蠻帝都に朝すと。云々(二〇〇—二〇一頁)

然らば問ふ、經濟組織の改造なるものは、貧乏根絶の根本策たる可きか。博士直ちに答へて曰く、否。根本中の根本策は人間の改造である組織の改造では決してない。茲に至つて理想家たり、モラリストたる博士の面目は躍如として現はれる。然らば更に問はん、人境遇を造るか境遇人を造るか。之に對して博士の答ふる所は必しも簡明直截とは云ひ難い。即ち博士は一方に於て社會の制度組織が人の精神思想を形くる上に多大の影響をなす事を否認せず、特に此派の大思想家カアルマルクスに敬意を表して、彼が自己の言葉を以て始めて唯物史觀の精髓を述べたと稱せらるゝ「經濟學批評」序文の一節を翻譯して讀者に示して居るのみならず、更に論語を引き熊澤蕃山を引き、孟子を引いてマルクスの説に裏書して居る。併し乍ら幾度も議論を

繰返して居るうちに博士の眞意は「マルクスがカントか」と尋ねればマルクスではなくて實にカントにあるのだと云ふ事が容易に看取される。即ち博士は曰く、「人は境遇を造り、境遇も亦人を造る。乍併その何れが本なりやと云へば境遇は末で人が本である」(二一六頁)又人間の改良さへ行ふ事が出来るならば「縦ひ社會の制度組織は今日のまゝで有らうとも、確に立派な社會を實現することが出来て、貧乏根絶と云ふが如き問題も直に解決されて仕舞ふのである」と。(二三八頁)さて貧乏問題の根本中の根本的解決が組織の改造にないこと云ふ立場が明になれば、そこで「貧乏物語」最後の結論が與へられる。要は人心の改造である。人間の心懸けを入れかへると云ふ事にある。然らば如何に心懸けを入れ替ふ可きかと云へば先づ消費者としては奢侈を慎むことである。生産者としては營利一方に偏せずして利他奉公の精神を忘れぬと云ふこと

である。是等の點に就ては私は既に中篇を論ずる場合に稍々詳細なる批評を試みた。私はたゞ營利的經濟組織を維持しつゝ營利に專なる勿れと云ひ、餘裕の資力を與へ置きながら奢侈に耽る勿れと云ふは強いて難きを人に求めるものだと云ふを繰返すに止める。私自身の考へを云へば人心の根本的改造は社會組織の改造を俟たずして之を期す可らず。然らば社會組織の改造は容易なるかと云へば、現在の勢力關係の下に於ては之を行ふこと實に非常の困難事なりと答へ度いのである。

顧みれば、物質生活を改善するに非れば、(即ち貧乏を根絶するに非れば)吾々の倫理的向上(即ち人心の改造)は不可能であると云ふ立場から出發して「貧乏物語」一巻は著はされた。而して其貧乏根絶の方法如何と云ふとき、著者はその最も根本的なものとして「人心の改造」を以て答へる。即ち彼れは徹頭徹尾モラリストであ

り理想主義者である。河上博士は最近スマーットの「第二思想」を紹介し更にスマーットの師匠たるジョンラスキンの *Unto this Last* を論ずる一文を公にされつゝある之に依ても吾々は博士が最近の思想の如何なる方向に傾きつゝあるかを知ることが出来る。實に博士は曾てカアライル、ラスキンが英國經濟學に加へたと同じ批評を我々經濟學に加へんとするものである。たゞ彼れは外より來つて經濟學に近づき此は内より出で、經濟學を導かんとするの相違あるのみ。私は「貧乏物語」が主張する所の見解に對しては異見を懷くこと既に上に述べたる通りである。併し乍ら之あるの故を以て其著者に對する尊敬の念は些かも傷けらるゝ所あるなし。筆を擱くに臨み再び繰返して云ふ。余は實に最も面白き讀み物として「貧乏物語」を江湖に薦め、又近時に於ける最も有益の著作として之を廣く同學の諸君子に紹介し得ることを喜ぶものである。妄評多罪